

活動概要

I. 教育活動

I-1. Add-on Program 「多言語・多文化社会」

日本社会はもともと、アイヌ先住民や、在日コリアンなどのオールドカマーの存在を考えれば明らかなように、決して単一かつ均質なものではありませんでした。けれども、1990年以降、いわゆるニューカマー外国人が増加することによって、多言語・多文化社会化が急速に進展し「目に見える」ようになってきました。また、国際結婚の比率の増加は、たんに外国人が「労働者」として入ってくるというのではなく、「住民」として日本社会の一員になりつつあることを示しています。

しかし、言語や文化的背景の違いなどにより、職場、地域社会、学校などで多くの問題や摩擦も生まれています。自治体、企業、地域、学校、NPO・NGO、ボランティアなどさまざまな機関や組織・個人が問題解決に取り組んでいるものの、日本社会全体としての意識は、「差異」や「多様性」に対して、まだまだひらかれたものであるとは言えません。

Add-on Program 「多言語・多文化社会」は、日本

社会におけるこうした新しい状況に積極的に応えるために2006年度に開設され、2008年度に全ての科目が揃うこととなりました。このプログラムは、多言語・多文化社会の一員としての基礎的な知識を身につけると同時に、多言語・多文化社会日本が抱えるさまざまな問題解決に取り組んでいける能力を育てていくことを目指しています。

■ Add-on Program 「多言語・多文化社会」の仕組み

本学では7課程26専攻のいずれかを選び、また3、4年生では、「言語・情報」「総合文化」「地域・国際」の3コースの一つを選択します。本プログラムは、そうした基本的なカリキュラムの枠組みを前提にしながらも、既存の課程やコースにadd-on(追加)する形でプログラム独自の授業科目群を設定しています。すなわち、個別の言語とその言語が話される地域の文化・社会についての学習に特化するのではなく、また学問分野のどれか一つに限ることもなく、個別の言語や学問

Add-on Program開講科目一覧

部門	授業科目名	(開講時期)	単位
基礎部門	社会論入門Ⅰ	(1学期)	2単位
	社会論入門Ⅱ	(2学期)	2単位
理論部門	歴史と現在	(1学期)	2単位
	社会・文化	(1学期)	2単位
	政策と法	(2学期)	2単位
	言語とコミュニケーション	(2学期)	2単位
言語技能部門	言語技能入門Ⅰ	(1学期)	2単位
	言語技能入門Ⅱ	(2学期)	2単位
実習部門	実習Ⅰ	(1学期)	2単位
	実習Ⅱ	(2学期)	
プレゼンテーション部門	わたしの多言語・多文化社会論 (プレゼンテーション)	(2学期)	2単位
合計			20単位

分野を横断する形で授業が開講されます。それというのも現実の社会そのものが多言語化し、多文化化しているからです。たとえば外国人集住都市の小中学校の教室の中では、日系ブラジル人の子どものすぐ隣にフィリピンや中国・韓国から来た子どもたちが並んで座っているという現実があります。

本プログラムの構成は、こうした現代的な状況により対応した形で、必要な知識やものの見方・考え方を学生たちに身につけてもらいたい、との考えに基づいています。Add-on Program「多言語・多文化社会」は、(1)基礎部門、(2)理論部門、(3)言語技能部門、(4)実習部門、(5)プレゼンテーション部門の5部門から構成されています。理論部門はさらに4つの分野にわかれます。プログラムの全20単位(10科目)を取得した学生に対しては、本来の外国語学部のカリキュラムにのった学士号とは別に、「Add-on Program 多言語・多文化社会修了証」を授与します。

■ Add-on Program の特徴

2008年度に3年目を迎えたAdd-on Programは、実習部門、プレゼンテーション部門の開講をもってすべての科目が出揃い、プログラム全体としても際だった特徴を持つものとなりました。

多彩なゲスト講師

Add-on Program の魅力の一つは、本学の教員のみならず、他大学の第一線の研究者や、社会のさまざまな現場で活躍するゲスト・スピーカーが講師に加わっていることです。国の行政機関をはじめとして、地方自治体の職員、弁護士、精神科医、小中学校の教員、NPO・NGOメンバー、経済団体や国際交流団体の職員など、多分野の視点からの講義を聴くことにより、多言語・多文化社会に関する理論と実践的な知識を幅広く習得できるような工夫が施されています(「社会論入門Ⅰ」、「社会論入門Ⅱ」、「歴史と現在」、「社会・文化」、「政策と法」)。

講義リーディングスとコメントシート

言語技能入門Ⅱ、実習、プレゼンテーションをのぞくすべての講義において導入されているのが、「講義

リーディングス」と「コメントシート」です。講義リーディングスは、各回のゲスト講師によって提示された講義に関連の深い文献を1冊にまとめたものです。事前の予習において抱いた疑問点や関心を、講義のなかで確認・発展させ、以後の学習に役立てることを目指しています。コメントシートは、学生が毎回の授業内容を振り返ると同時に、担当教員や各ゲスト講師とのコミュニケーションツールとして、今後の授業プログラムを考えるうえで積極的に活用されています。

参加型の授業

Add-on Programでは、受講者と講師、受講者どうしの相互のやりとりを重視し、学内の留学生との合同授業、グループワーク、グループプレゼンテーション(「社会論入門Ⅰ」、「社会論入門Ⅱ」、「言語技能入門Ⅱ」)や、講義後の質疑応答・ディスカッションなど、参加型の手法を多く取り入れた授業を行っています。

多言語・多文化社会の現実に触れる

授業で得た知識は、必ずしも現実の課題に対して即座に答えを用意するものではありません。Add-on Programでは「実習」の授業を設け、外国人児童への日本語・学習支援や、外国人相談を含む国際交流活動を行っている組織・団体でのボランティア活動の機会を提供しています。受講者が、授業で学んだ知識と現場での経験を相互にとらえかえすことで、総合的な学びを目指しています。履修にあたっては、「社会論入門Ⅰ」、「社会論入門Ⅱ」の両方の単位を取得することが条件となります。

つなぐ力を身につける

Add-on Programでは、「コミュニティ通訳」という役割に特に重点を置いています。言語・文化のうでさまざま異なる背景を持った人びとが、日本社会で暮らしていく際の橋渡しをすること、それが、26の専攻語を持つ東京外国語大学で学ぶ学生たちが、多言語・多文化社会において果たする役割のひとつであると考えています。「言語技能入門Ⅰ」では、コミュニティ通訳としての基礎知識と心構えを、「言語技能入門Ⅱ」では、英語、中国語、朝鮮語、スペイン語、

ロシア語、日本語、ポルトガル語、フィリピン語による実践的な技能を学びます。また、「言語とコミュニケーション」では、多言語・多文化社会における異言語・異文化間コミュニケーションにまつわるさまざまな問題を、言語社会学の見地から学びます。

伝える力を磨く

多言語・多文化社会にかんするさまざまな知識と現場での体験を往復するなかで、学生は多くのものを習得し、そこからさまざまな多言語・多文化社会の像を描くはずで、そうした個々の「学び」を総括する目的で、Add-on Programの最後の科目に位置づけられているのが、「わたしの多言語・多文化社会論(プレゼンテーション)」です。履修にあたっては、Add-on Programの残りの18単位(9科目)をすでに取得していることが条件となります。

この科目は、外国語学部のカリキュラム全体に例えるならば、いわば「卒業論文演習」にあたるものですが、Add-on Programでは、多言語・多文化社会の課題に取り組むにあたって、プレゼンテーションのスキルを特に重要なものと考えています。授業では、各自が設定したテーマを効果的なプレゼンテーションとして表現するさまざまな技法を学びます。本学の学生がそれぞれの専門における言語スキルだけでなく、さまざまな知識や視点を身につけながら、多言語・多文化社会において、出来る範囲での活動を実践していく一そのための足がかりとして、「わたしの多言語・多文化社会論」は位置づけられています。

多言語・多文化社会を考えるための多角的な視点を養う

基礎部門、理論部門、言語技能部門などの各分野にまたがるAdd-on Programは、学生の興味関心に応じた一つの授業のみを聴講することもできますが、同時にいくつかの、さらに次の年に別の授業を履修することによって、もっともその効果を発揮するものです。

例えば、「外国人住民と医療」というテーマをめぐっては、ある授業では受け入れる病院側の視点から制度上の問題が指摘され、また別の授業では日本語が不自由な患者のサポートをする医療通訳者の視点から、コミュニケーション上のさまざまな課題や問題点が掘り

下げられます。また、例えば外国人住民が数多く暮らしている新大久保という地域に関しては、一方では地域住民としての外国人の立場から共生にむけてのさまざまな試みが、他方では、日本の公立学校で教育に携わる教師としての立場から、外国につながる子どもたちの心の葛藤が語られます。ここから見えてくるのは、年々増加する「外国人」が、単なる労働力ではなく、共に暮らす生身の人間であるという重大な事実です。

こうして、各授業で扱われるトピックが網の目のように結びつき、多言語・多文化社会における課題が総体として浮かび上がってくる、また、学んだことや課題をディスカッションやプレゼンテーションを通じて自分の言葉で表現できる……。それがAdd-on Programの持つ魅力であり、一人一人をより具体的な実践へとひらいていく芽を生み出しています。授業をきっかけに、まず自分ができることは何かを考えたなら、「多文化コミュニティ教育支援室」を拠点とした日本語・学習支援や、国際理解教室の学生ボランティアの活動に携わることもできます。その実践のなかで感じた疑問や発見を、また授業を通して深く見つめ直す……。そのような双方向の刺激がAdd-on Programを通じて実を結んでいくことを願っています。

■今後の課題と展望

2008年度は、これまでに多くの検討を重ねてきた結果、各科目の内容構成や授業の方式などが、ある程度定まってきたことが大きな成果でした。他方で、たんに興味のある科目のみを履修するだけでなく、Add-on Program全体としてより多くの学生の関心を引きつけるためのさらなる工夫が必要とされています。

今後は、履修科目概要や新入生オリエンテーションなどの授業案内において、Add-on Programの概要をわかりやすく提示することや、Add-on Programのすべての科目を修了したいと考えている学生への履修相談に積極的に応えていくことが必要となってくるでしょう。また、とくに「実習」の授業を通じて、センターのもうひとつの教育活動である多文化コミュニティ教育支援室の活動や、社会連携活動との連動もより発展させていきたいと考えています。

I-2. 多文化コミュニティ教育支援室

■多文化コミュニティ教育支援室の概要

多文化コミュニティ教育支援室は、学生たちが本学で学んだ世界各地の言語・文化に関する知識を活かしてボランティア活動を行うことで、多言語・多文化化する地域社会に貢献し、そうした活動を通じて自らを成長させていくことを支援するために設立されました。支援室は、多言語・多文化教育研究センターの設立に先立つ2004年10月に、文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」として発足したものであり、いわばセンターの原型となったものです。支援室は研究講義棟206室にあり、ミーティングスペース、図書、教材、パソコンその他の機材を備えています。現代GPとしての活動が終了した2007年度からはセンターの一部門となり、フルタイムの専従スタッフ2名、パートタイムの専門員2名、担当専任教員1名という陣容で活動しています。

支援室に登録している457名(2009年3月末現在)の学生ボランティアは、スタッフがコーディネートするさまざまな活動に関わるとともに、時には学生自らが主体となってボランティア活動を運営しています。また地域社会との連携も一時的なものにとどまらず、府中市の教育委員会や川崎市総合教育センターとは、日本語・学習支援や国際理解教育活動に関する覚書を結んでいます。「多文化共生」に関する学生ボランティア支援に関して、これだけ充実した物的・人的・ネットワーク的リソースをもつ大学は全国的にも珍しく、世界各地の言語・文化を学ぶ大学という本学の特徴を活かした地域連携と実践教育の場となっています。

■日本語・学習支援活動

支援室の活動の大きな柱のひとつに、外国につながるを持つ子どもたちのための日本語・学習支援活動があります。これは支援室に登録した学生ボランティアが小中学校や地域の施設等に出かけて、教員や施設等の職員と相談協力しながら、外国につながるを持つ子どもたちの日本語・教科学習を支援するというものです。ボランティア学生の多くは日本語・教科指導の訓

練を受けていませんが、そうした学生が活動できるように日本語・学習支援専門員や支援室スタッフが学生たちへのアドバイスや活動先の学校との連絡調整などを行っています。こうした活動にかかる交通費については、学生の金銭的負担を軽減するため活動先の学校や自治体に負担していただく方針をとっています。

2008年度は、府中市や川崎市、足立区の教育委員会との連携のもとに、多くの学生たちが小学校、中学校で子どもたちの支援をしました。そのほか、江戸川区立葛西中学校においても定期考査前の支援を行いました。地域でのボランティア活動としては、府中市の府中国際交流サロンにおいて、学生たち自身が子どもたちへの支援活動をコーディネートし、活動しています。川崎市ふれあい館では職員の指導のもと、子どもたちが抱える困難についても学びながら支援を続けています。子どもたちは、年齢の近い学生に自分の本音をぶつけることで、自らを振り返り、成長していきます。学生自身も、子どもとともに困難を乗り越えることで、自信を深め、大きな学びを得ることができているようです。



日本語・学習支援活動の様子

■国際理解教育活動

学生ボランティアはまた、小・中・高校生を対象とした国際理解教育の実践にも取り組んでいます。

例えば、在籍児童の6割以上が何らかの形で外国につながるをもつという新宿区立大久保小学校では、5、

6年生の子どもたちと一緒に、外国のお話を劇や紙芝居にして発表するという実践に取り組みました。中国、韓国、タイの文化を、大学生が小学生に「教える」のではなく、子どもたちの身体の中にある「文化」を引き出しながら、自然な形で外国の文化を理解することを目指しました。

また、神奈川県内の4つの高等学校と協働で行った夏季集中講座(CEMLA)では、国際理解教育専門員と共に、高校生のフィールドワーク(モスクの見学)やグループ学習をサポートしました。

こうした活動の中で、学生達が学んでいる外国語や外国文化に関する知識、感性が活かされるのは言うまでもありませんが、教師ではなく、子どもたちと年齢の近い、お姉さん、お兄さんの立場で学生たちが関わることにも、大きな意味があります。子どもたちは、実にのびのびと活動に取り組み、しばしば、担任の先生も驚くような表情を見せてくれます。それは、「教える→教えられる」という関係ではなく、学生たちが、常に「共に学ぶ」場づくりを強く意識しているからではないでしょうか。



国際理解教育実践の様子

■教育研修プログラム

このように、支援室の学生たちは、日本語・学習支援活動や国際理解教育活動を実施していますが、本学における正課の講義のなかで得られた知識だけでは、質の高い実践を行うことは困難です。すなわち、日本語・教科指導に関する知識や教授法、子どもたちとコミュニケーションを図るやり方、小中学生に対してわかりやすく自分たちの意図を伝える技法や授業案、そ

してボランティアとして活動するにあたって必要な心構えやマナーなど、多くのことを学ぶ必要があります。そこで支援室では、学生がこうしたことを学ぶためのさまざまな課外学習の機会を用意しています。

2008年度は、「多言語・多文化共生学講座」として、国際理解教育や学習支援活動に必要な基本的な知識、技能を学ぶ講座を実施したほか、新宿区の大久保や、神奈川県川崎市南部など、多言語・多文化化する都市や地域社会を実際に訪問し、そこに暮らす人々と交流するスタディ・ツアーも実施しました。

また、学生たちが中心となって行った、「フィルム・フォーラム」というプログラムもあります。これは、有名な映画を題材に多文化について考えようという企画で、気軽に支援室の活動を知るきっかけづくりとして、学生ボランティアが中心となり企画・運営、当日の進行などを行いました。

いずれも、完全な課外活動として行われたにも関わらず、多くの学生が熱心に参加し、その後、かなりの割合で、支援室のボランティア活動にも参加しています。

■キャンパス内での活動

新学期には、主に新生を対象とした活動説明会や交流会など、さまざまなイベントを行いました。イベントの企画運営は学生ボランティアを中心に進められ、学生ボランティアにとっても、自分自身の活動をふりかえり整理する、ひとつの良い機会となっているようです。

また、本学では年に2回(7月、11月)オープンキャンパスが行われますが、その際に、学生ボランティアたちが、訪れた高校生たちを対象にワークショップを行いました。外国から日本にやってきた子どもたちが教室の中で感じる気持ちを体験できるようなプログラムなど、学生たちは工夫を凝らし、高校生からは「入学したらぜひこの支援室の活動をしてみたい」という声も多く出ました。

また、今年度新たに始まった活動として、留学生支援の会との連携があります。これまで、同じキャンパスにしながら留学生と日本人学生の交流の機会があまりなく、それが課題でもありました。今年度は、留学

生支援の会との共催で交流会(7月、1月)を行いました
が、多くの留学生や日本人学生が参加し、大盛況で
した。今後も支援の会との連携を深め、少しでも交流の
機会を増やせるようにしたいと考えています。

■その他の活動

支援室が支援している学生の自主的な活動として、
「Amigos」「うりぬり」「GIRASOL」といった学生サー
クルが独自の活動を行っています。「Amigos」では、
鶴見総合高校での学習支援活動やブラジル青少年フェ
スティバルへの参加、「うりぬり」では、韓国の留学
生と日本人学生との交流会や勉強会、また、品川区立
杜松小学校「すまいるスクール杜松」での韓国文化理
解講座などがあります。「GIRASOL」は、スペイン語
専攻の学生を中心に、「国際協力」という視点からラ
テンアメリカについて学び、フェアトレードをテーマ
にしたものなどさまざまなイベントも企画していま
す。支援室では、こうした学生の自主的な活動におい
て、学生からの相談や要望などに随時対応し、企画を

実現するための手助けを行っています。

■今後の課題と展望

多文化コミュニティ教育支援室が多言語・多文化教
育研究センターの一部門となってから2年目を迎えた
2008年度においては、それぞれの活動がいっそう充
実ただけでなく、活動の方針や理念もより明確なも
のになってきました。また、一人の学生が、日本語・
学習支援、国際理解教育、学生の自主活動などのすべ
ての活動に関わることも増え、支援室としても、それ
ぞれの活動の接点をより意識した支援にむけて日々工
夫を凝らしています。これまで別々に行われてきた日
本語・学習支援と国際理解教育活動の連携を深めるた
めに、2008年度後半からは、週に一度のスタッフミー
ティングを実施し、意見交換や課題の共有に努めてい
ます。今後は、Add-on Programとの連携をいっそう
深め、「多言語・多文化社会」を学び、実践するとい
うセンター独自の教育活動を、内外にアピールしてい
くことを目指したいと考えています。